

遺跡に学ぶ

No. 42

原始・古代の土器 1

縄文時代



公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団
<http://www.gunmaibun.org/>

1-2019

はじめに

房谷戸遺跡は昭和時代の発掘調査である。昭和57年と58年に調査され、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中世の遺構、遺物が発見された複合遺跡である。表紙に掲載した、縄文時代中期前半(約5000年前)の出土土器10個体が、平成3年に国重要文化財に指定されている。指定理由は「縄文時代中期前半の関東諸地域の形態と意匠が集約された一群の土器とすることができ、関東地方該期の異地域・異型式土器の混合及び在地化の様相を知る上で、その学術的価値は高い。」とされた。

1. 異系統土器群の共伴現象

重文の指定理由にもあった、異地域・異型式土器の混合は「異系統土器群の共伴」と呼ばれ、縄文時代中期前半期の遺跡出土土器の大きな特徴として位置付けられている。

「異系統土器群の共伴」とは

*一遺跡内での異系統土器の共存

*一遺構内での異系統土器の共存

*一個体内での異系統土器文様の共存

というように、違う種類の土器あるいは土器文様が、同時に一つのステージに存在するという、極めて重要な現象である。これは、共伴する個々の土器が同時期であるという証拠にもなり、また、「異地域」の土器製作者が、集落内に同時存在していたことを現しているのである。さらに、房谷戸遺跡出土土器には異系統土器文様が相互に影響し合った文様構成も見られ、異なる地域の土器文化が、群馬県の一つの集落内で混在しながら、融合した様相が具体化した例である。

房谷戸遺跡の出土土器群は、

a) 東関東～北関東地域に分布する阿玉台式土器

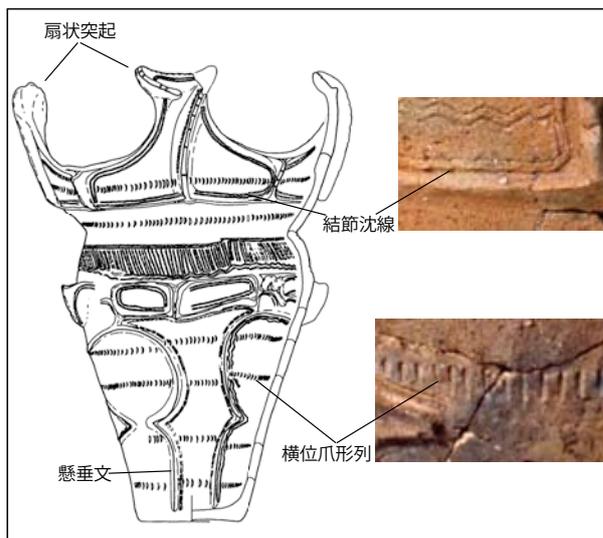
b) 南関東及び信州地域に分布する勝坂式土器

c) 群馬県独自の在地色の強い土器

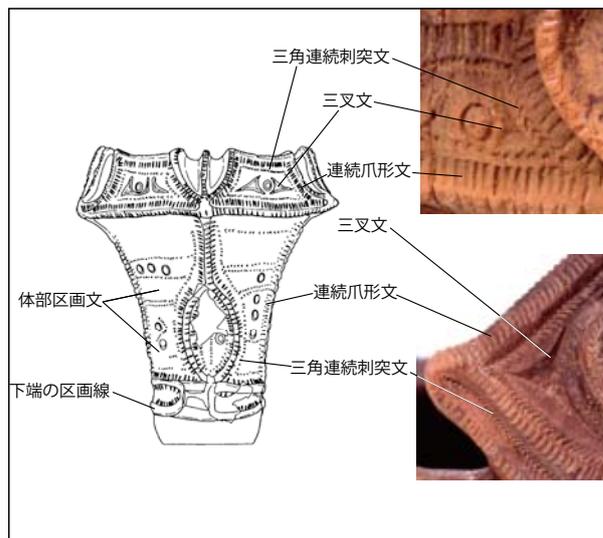
この3つのタイプが共存した様相を示している。

a) 阿玉台式土器

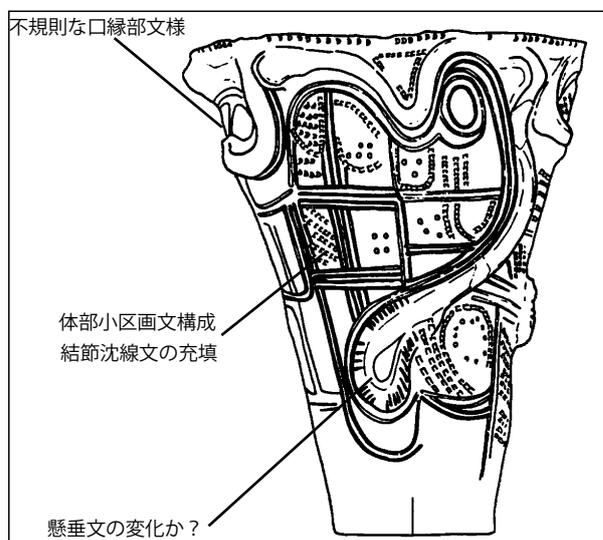
重文指定された土器のうち4個体が阿玉台式土器の深鉢である。また大型浅鉢1個体も阿玉台式に属すると考えられる。4個体の深鉢は大型品で口縁部に扇状突起を四単位配し、頸部に強い屈曲を持つ3個体や直線的な体部1個体がある。い



a: 阿玉台式土器の特徴



b: 勝坂式土器の特徴



c: 在地色の強い土器の特徴

ずれも体部文様は懸垂文構成といわれる下端が区画されない文様構成を示す。阿玉台式土器の特徴としてこの懸垂文構成が挙げられる。また文様構成も4単位構成など対称性を維持する傾向が強い。

b) 勝坂式土器

2個体が勝坂式である。連続爪形文と三角連続刺突文2種類の刺突文を隆帯の側線や上端線にして装飾する。口縁部は把手や突起が付けられ、体部は区画文が発達する。これは阿玉台式と対照的であり、横方向の区画文構成が勝坂式の特徴なのである。また、口縁部突起や把手も1単位構成を取り、体部文様単位も変則3単位の例が多く、対称性を崩す文様構成は、阿玉台式と対極をなす。

c) 在地色の強い土器

3個体の土器が在地系の土器として認識されている。従来の関東地方で解釈されてきた、阿玉台式土器や勝坂式土器などの土器型式では判断がつかない土器群である。群馬県で独自に発達した土器といえ、広域には分布を見ない文様構成である。口縁部区画文を持たないものや区画意識の弱い例。体部文様も懸垂文と区画文が融合したような文様構成を示す。

房谷戸遺跡のように、阿玉台式土器と勝坂式土器が共存する地域で、両者の文様構成が影響した文様構成とも考えられよう。

2. 房谷戸遺跡出土土器の意味するもの

房谷戸遺跡が調査された頃は、縄文土器研究の主流は編年論が主であった。これは出土土器に層位あるいは文様の特徴から、時間軸を与え、土器の年表を作成する研究方法である。この年表によって、発掘調査で得られた住居跡の時期や居住期間などが明らかになる。そのための判断材料として、土器の編年案が組まれていったのである。

一方、各地で大規模開発に伴う発掘調査が行われ、編年材料としての土器が大量に出土した結果、従来の時間軸を明らかにする縦軸の編年を主とした土器研究とは別に、横軸—すなわち土器の地域性や系統性を明らかにしようとする研究も盛んになっていた。出土土器の観察によって、各地域の土器文様の特徴が具体化され、地域相互の土器群の比較が果たせるようになり、時間軸と空間軸によって得られた土器の「系統」も重要視されるようになったのである。

房谷戸遺跡の調査と出土土器は、ちょうど土器研究の変換点にも位置していたのである。編年研究に系統論も加えた研究材料として、房谷戸遺跡出土土器群は、阿玉台式と勝坂式土器、さらに在地色の強い土器群が共存する一つの集落、一つの遺構、一つの土器が提示された遺跡として重要な位置を占めていたのである。

もちろん、編年も系統も研究者が使用する土器を理解するための「枠組み」である。この枠組みを統括する土器の単位に「型式」が設定されており、私たちは、この型式を研究のために使用しているのである。

3. 他者の視線

さて、房谷戸遺跡出土土器は数種類の異なる系統の土器群に占められていることを述べた。中期集落内で複数の土器文化が共存する社会である。このように縄文中期社会において、集落あるいは周辺集落で、作成される土器および土器文様は、集団内で認知・認識されたものである。ゆえに、中期集落跡で出土した土器は、その集落内で認知・認識されていた土器であったと推定できる。つまり、中期集落跡で出土する異系統土器は、その集落内で、認知・認識されていたのであり、排除はされず受容されていたと考えられる。

前述のように、「異地域」の土器製作者が、集落内に同時存在していたことは、一つの集落内に様々な系統のもと、多様な価値観を含んだ集落構成員の「視線」が存在していたことになる。もちろん土器製作に関わる視線も含まれており、中期集落に存在する異系統土器は周囲の様々な視線の中で製作あるいは使用され、周辺の土器文様との相互影響が果たされたのである。いいかえれば、装飾性に富んだ中期土器は、他者の視線を意識して、他者の価値観を受容するための装飾性と捉え返すことができるのである。

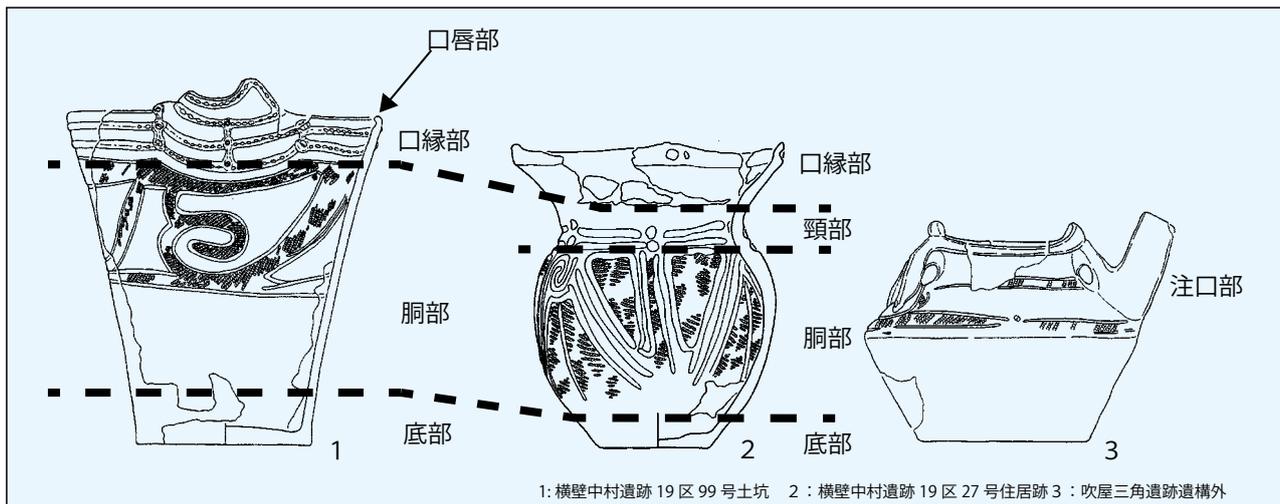
おわりに

中期土器群には複雑な系統が絡み合う脈絡ともいえる文様が数多く見られる。この複雑な土器文様を理解するためにも、研究の変換点にある房谷戸遺跡出土土器を再吟味する必要があるだろう。今後の研究と取り組みによって、昭和時代の調査資料も、さらに脚光を浴びるものと期待したい。

1. 縄文土器の部位

縄文土器には、第1図のように各部位に名称がついており、上から順に口縁部、胴部、底部と呼ばれている。特に口縁部と胴部に施文された文様などの特徴は、時期や地域によって異なった特徴を持つことから、細かく名称がついている。例

えば「口縁部」は、口縁部の上端部を「口唇部」、「口端部」と呼び、口縁部が波状になるものを「波状口縁」、平たいものを「平口縁」と呼ぶ。他にも注口部を持つ土器、頸部、脚部を持つ土器など様々な形に応じて名称がつけられている。

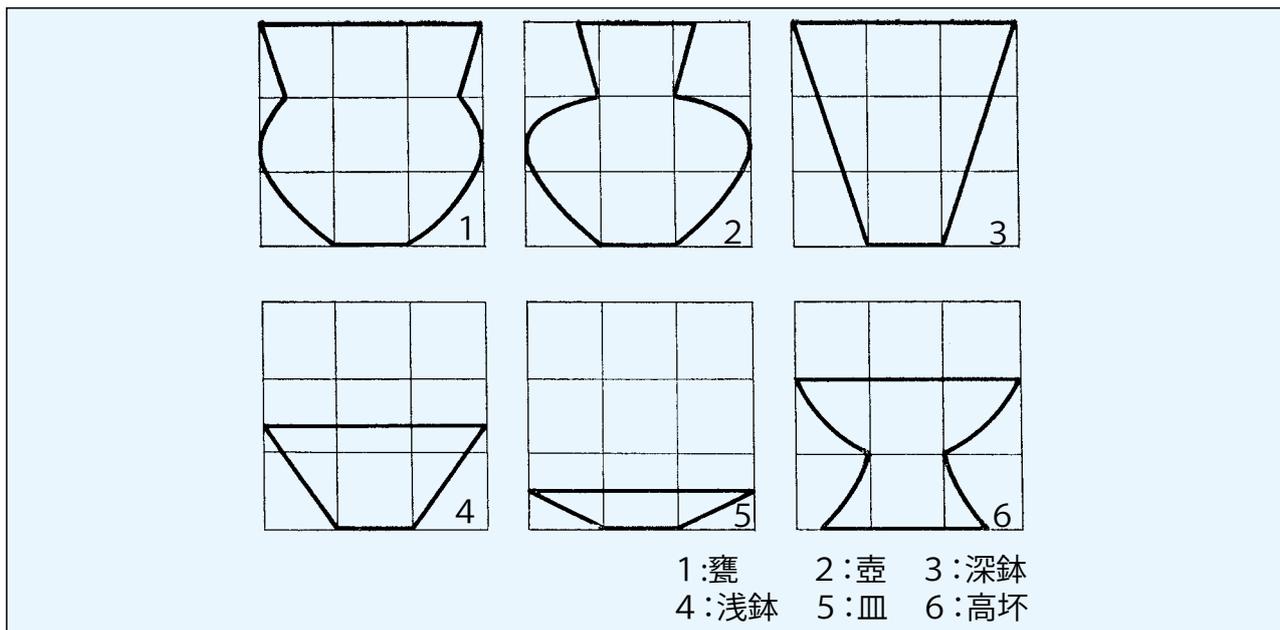


第1図 縄文土器の部位名称

2. 縄文土器の形・器種

土器の形は、第2図のようにあらわされることが多いが、この図はあくまでも目安で、便宜的なものであり、その枠組みにすべてが収まるわけではない。例えば、器高が口径の3分の2以上（第2図-3）を占めるものを深鉢形土器、3分の2以下

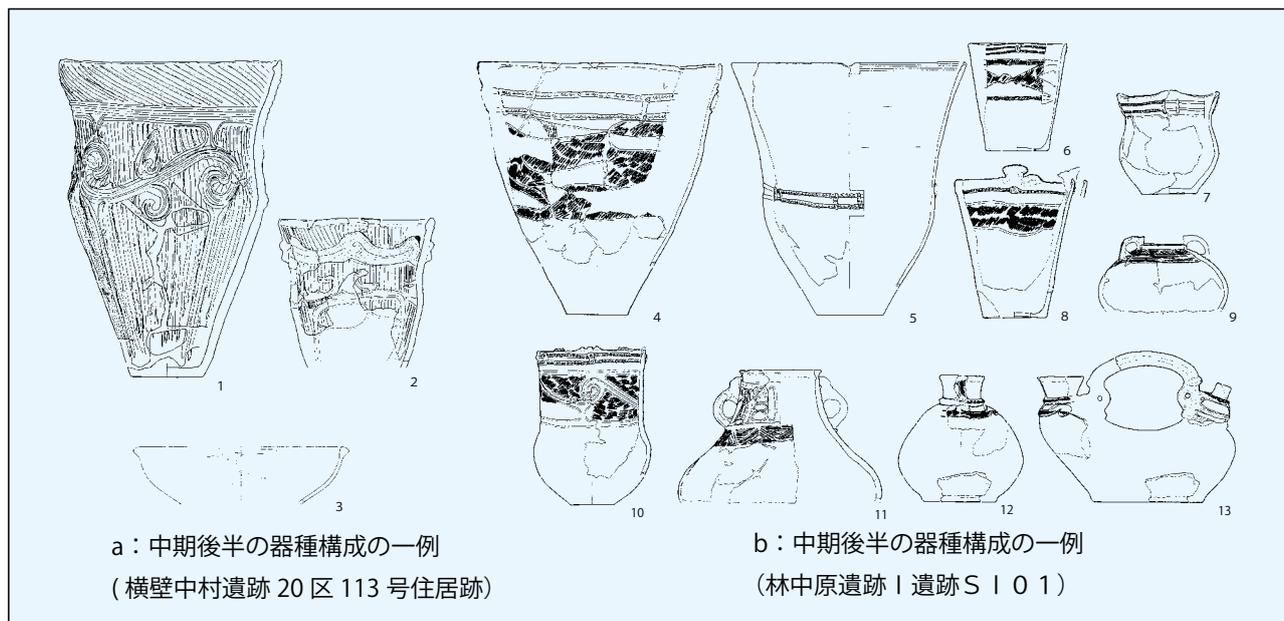
を占めるものを浅鉢形土器（第2図-4）と呼ぶ。形の名称については、ほかにも鉢や皿（第2図-5）、注口土器（第2図-7）、台付鉢（第2図-8）などがあり、それぞれ異なった機能と用途がある。



第2図 縄文土器の形（甲野1976から引用）

縄文土器の器種は、時期を通して普遍的にみられる器種と新たに使用され始める器種がみられる。全時期にわたって使用器種には、煮沸用土器として使用された深鉢形土器が挙げられる。深鉢形土器は、縄文時代早期に底部が尖底から次第に平底へと変化し、器厚も厚手から薄手へと変化していく。一方で、ある時期から製作される土器としては、注口土器や台付鉢などがある。注口土器は、縄文時代中期後半に注口付き浅鉢からの系統

を引く土器で、縄文時代後期中頃に最も多く作られるようになる。注口土器のように縄文時代後期になると、縄文時代中期よりも器種が増加する(第3図)。縄文時代後期では、台付鉢などの日用品から異形土器や香炉形土器などの祭祀的な土器まで様々な機種が作られるようになり、このような事象を「器種分化」と呼ぶ。なぜこのような分化が生じるのかについては、社会的な変化や精神的側面など諸説言われている。



第3図 縄文時代中期と後期の器種構成の比較

3. 縄文土器の機能と用途

縄文土器の用途については、器種によって煮沸用や盛り付け用、貯蔵用、祭祀用、埋蔵用などの用途が想定されている。

煮沸用の土器

縄文土器の大きな役割として、食べ物を煮炊きする機能が考えられる。実際に縄文土器には、ススやオコゲなどの痕跡が見受けられる。縄文土器の器種としては、深鉢形土器が多く、作りが粗雑な土器で、一方で精巧な文様を施し、波状口縁を持つような土器には、そのような痕跡は少ないという特徴が見られる。前者の土器を粗製土器、後者の土器を精製土器と呼ぶ。土器の大きさは、精製土器よりも粗製土器の方が大きく、出土量も半数以上を占める。これらの特徴から粗製土器を日常的な土器(ケの土器)、精製土器を非日常的な土器(ハレの土器)とする見方が生まれた。今日的には、煮沸具としての縄文土器の使用には段階

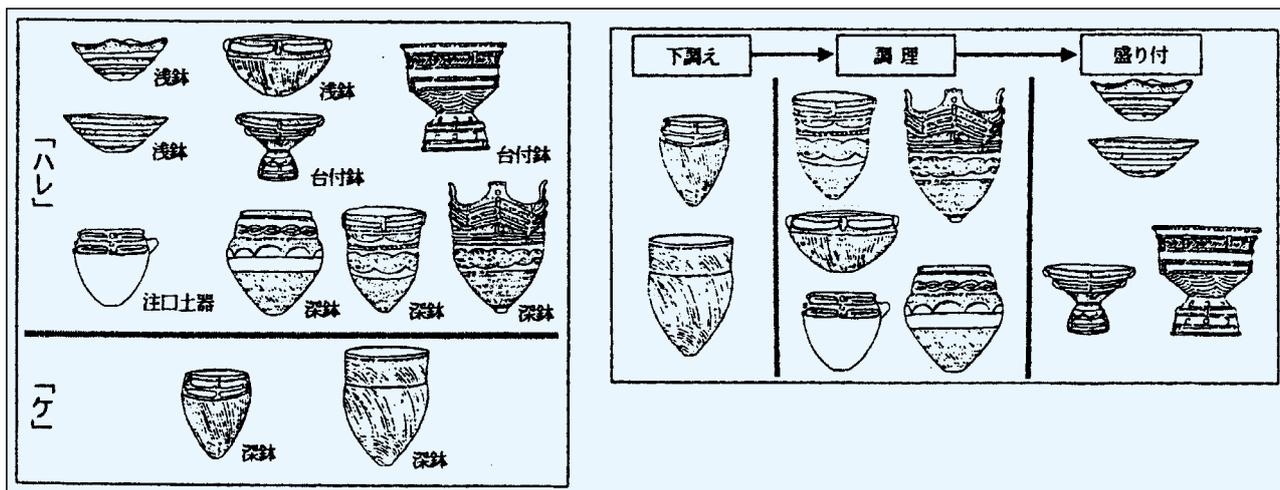
があり、第5図のように用途に応じて使用されたと考えられている。

盛り付ける土器

盛り付ける土器には、鉢形土器、皿形土器、注口土器等が考えられる。現代の食卓では、お茶碗など個人に帰属するものや大皿、急須など家族で共有するものがあり、前者を「属人器」、後者を「銘々器」と呼ぶ。縄文土器を見てみると、住居跡からお茶碗くらいの鉢形土器や皿、注口土器がまとまって出土することがあり、家族のどんらんに使われていたと考えられる。

貯蔵用の土器

貯蔵用には、深鉢形土器や壺形土器などが考えられ、貝輪や、石器の材料などが深鉢形土器から出土事例がある。また有孔罅付き土器には、酒造説などもある。ほかの用途としては、水がめとしての役割を持つ土器もあったと考えられる。



第4図 縄文土器の粗製土器と精製土器の機能（阿部 1996 から引用）

祭祀用土器

縄文時代の祭祀に関しては、諸説あるが、煮炊きをする祭祀の存在が言われてきた。実際に縄文時代後期以降にやや粗く作った土器と精巧に作った土器の精粗の分化がみられるのもその一例だと思われる。また香炉形土器などの特異な土器の出現、特殊な文様モチーフを持った土器など、儀礼をうかがわれる資料が出土している。

埋葬用の土器

埋葬用土器には、弥生時代だと甕棺墓などが存在し、縄文時代でも東北部で、骨壺のようなものがみられ、関東地方でも深鉢形土器を用いた再葬墓がある。諸説あるが、埋葬も幼児などの埋葬に用いたとされている。

また副葬品としては、小型鉢など個人に帰属したものや特殊な文様を持ったものなどがみられる。

・引用・参考文献・

- 阿部芳郎 1996「食物加工技術と縄文土器」『季刊考古学』第50号 雄山閣
- 黒澤照弘ほか 2009『横壁中村遺跡(9)縄文時代後期住居編2』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第466集
- 甲野勇 1976『縄文土器の話』学生社
- 佐原真 1979「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ』2 雄山閣
- 藤巻幸男ほか 2007『横壁中村遺跡(5)縄文時代中期後半住居編』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第406集
- 富田孝彦 2010『林中原I遺跡IV』長野原町埋蔵文化財報告第20集 長野原町教育委員会
- 友廣哲也 2010『上江田西田遺跡 源六堰遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第497集
- 黒澤照弘ほか 2009『横壁中村遺跡(8)縄文時代後期住居編1』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第462集

文様の種類

「心身がひっくりかえるような発見」

これは、「芸術は爆発だ」で知られる芸術家・岡本太郎氏が、初めて縄文土器を目にした時の感想として残した言葉だ。また、彼は縄文土器の美について、「縄文の美は八方に挑んでいる。無限に流れ、くぐり抜け、超自然の神秘に呼びかける想像を超えた造形。驚異的空間性。激しく、混沌に渦巻くダイナミズム。」と表現している。

土器は、粘土を素材として様々な形を作り、焼くことによって硬い容器としたものである。これは、人類が物質の化学的変化を利用した最初の発明と言われている。可塑性のある粘土を素材としたことにより、ある程度の制約はあるものの、さまざまな形や大きさのものを製作でき、また、その表面上に複雑な文様を表現することを可能にしたのである。

縄文時代は、1万年以上に及ぶ長期間にわたり続いた時代である。その間には、無数の土器が製作され、その表面には、実に様々な文様が施された。ただ、その文様は無秩序に施されたわけではなく、特定の時期、特定の地域では、それぞれ類似した文様が施された。時の経過とともに、その地域を拡大させたり縮小させたりしながら、また、文様そのものも少しずつ変化しながら描かれ続けていたのである。土器が出現した当初は、文様は少なく、わずかに細い粘土紐を貼付したもの

が認められる程度であり、まったく文様のない土器もあった。それが、縄文時代の中頃には、岡本太郎氏が表現するように、土器の表面を立体的かつ複雑な造形で飾るものまで登場してくるのである。

文様の種類

縄文土器の表面に施された文様は、実に多様である。その代表が、「縄文」である。これは、明治時代に、お雇い外国人であったエドワード・モースが東京の大森貝塚で見つけた土器を「cord marked pottery」と呼び、のちに「縄紋土器」と訳されたことに始まる呼び方である。「縄文」は、植物の繊維を撚り合わせた縄を土器の表面上で回転させることより施された文様である。撚り合わせる縄の本数、撚り合わせる回数、回転させる向きなどを変えることにより、実にバラエティー豊かな文様を描くことが可能である。「縄文」のほかには、縄を木の棒に巻き付けて回転させた「撚糸文」、木の棒に刻みをつけて回転させた「押型文」、シノ竹のような管を利用した「竹管文」、筋状の凸凹のある貝殻を用いた「条痕文」、先のとがった棒状の工具で土器の表面を削ってつけた「沈線文」、粘土を貼り付けた「隆線文」や「貼付文」などがある。縄文人は、身近にあるさまざまなものや粘土そのものを利用して、また、それを押し付けたり、転がしたり、削ったり、貼り付けたり



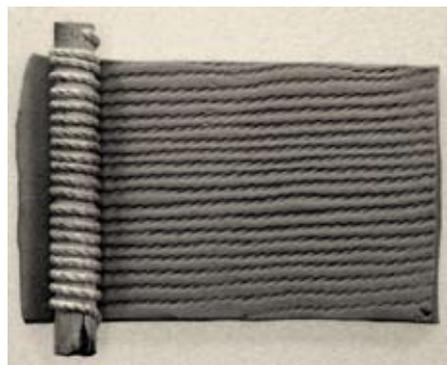
縄文時代草創期の土器 細い粘土紐を波状に貼り付けて文様としている。(渋川市白井北中道遺跡)



赤い渦巻き文の描かれた土器 (長野原町横壁中村遺跡)



羽状縄文 捻る向きが反対の2種類の縄を用いると鳥の羽のような文様を描くことができる。



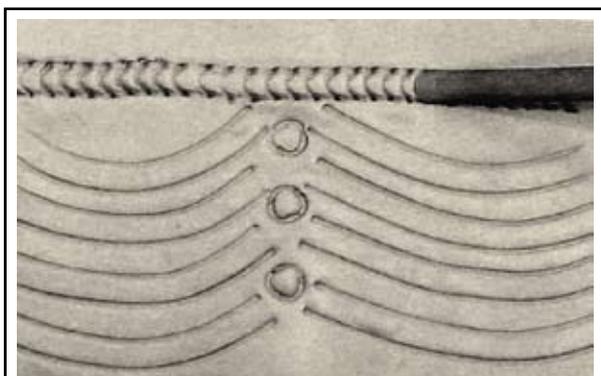
撚糸文 縄を巻き付けた木の棒を回転させる。交差するように巻き付けると網目状の文様もできる。



押型文 木の棒に刻みをつけて回転させる。刻みの付け方で、山形や楕円形などの文様ができる。



条痕文 貝殻や植物の束を用いて筋状の線を描いたもの。



竹管文 断面を利用した円文や、シノ竹を半分に分けて平行線を引くことができる。



縄文と竹管文の組み合わせ

と様々な手法を用いて多彩な文様を描いている。まさに粘土の可塑性をもつという特徴を十分に生かしているのである。また、時期によっては、漆に赤や黒の顔料を混ぜて文様を描いたものも見つかっている。

土器は時間のものさし

縄文時代は、古いほうから「草創期」、「早期」、「前期」、「中期」、「後期」、「晩期」と、大きく6つの時期に区分され、この各時期は、さらに細かく分けられている。この時期を区切る目印とされ

ているのが縄文土器であり、土器の形や土器の表面に施された文様が大きな目安となっている。考古学では、時間の経過をはかる「ものさし」の一つとして土器を利用しているのである。特に、縄文土器の研究では、「型式」という分類が用いられる。具体的には「勝坂式」や「加曾利E式」といったものが型式と呼ばれるものである。型式は、土器の形の差や文様の違いを抜き出して基準とし、同じような形や文様で製作された土器のまとまりのことを指している。そして個々の型式は、ある一定の時間的な幅と空間的・地域的な広がりをも

もっている。そして、この「型式」を地域や時間的な前後関係を基準にして並べたものを「編年」と呼び、日本中の縄文土器の編年が組み立てられている。ある遺跡から土器のかけらが見つかった時に、その遺跡の時代が分かるのは、土器に残された文様があるからなのである。この土器の文様は、「〇〇式」の文様だから、この遺跡は、縄文時代の「〇〇期」の遺跡である、といった具合である。

文様の意味

文様は、土器を製作するうえでは、必ずしも必要ではない。古墳時代の土器である土師器には、ほとんど文様が施されることはない。それでも器としての機能を果たすことは十分に可能である。しかし、縄文土器には多くの文様が施されている。縄文人が土器を製作するうえで、最も力を注いだのが文様と言えるかもしれないほどである。

文様は、土器を作る際の粘土紐の痕跡を消し去るとともに土器の表面を滑らかにすることに始まり、それが、しだいに装飾としての文様を描くようになったものと考えられている。しかし、文様は、無くても問題ないものである。それでも、縄文人は土器の表面を文様で飾り続けた。長い縄文時代を通じて様々な文様が生まれ、土器の表面に描かれてきた。その文様は、まるで流行のように

次々と生まれては消えていった。同じ時期の土器であれば、一つの遺跡で見つかる土器は、どこか似たような文様が施され、少し離れた遺跡でも同じような土器が見つかるのである。これは、土器の文様は、土器の製作者が好き勝手に描いたものではないことを示している。土器を観察すると、文様の種類、使用する道具、文様を描く位置、文様を描く順番まで、ルールが決まっていたようである。一つの集団があり、その中では、この土器製作のルールが共有されていた。そしてさらには、個々の文様もつ意味についても共有されていたと考えられるのである。

また、一つの遺跡を調査すると、その地域の文様の施された土器に混ざって、ほかの地域で流行した文様の施された土器が見つかることがある。そこには、ほかの地域で製作された土器が運び込まれた、ほかの地域の人々が移動してきて土器を製作した、ほかの地域の土器を真似して製作した、などいろいろな場面が想像される。いずれにしても、そこには、当時の人々の地域を越えた交流や情報の伝達、物の移動という側面を反映しているものと考えられる。土器に描かれた文様を研究することによって見えてくる一面である。

では、縄文人が文様に込めた意味とは何か。これを現代に生きる私たちが読み解くことは、非常に困難である。それでも、いくつか手掛かりにな



縄文時代前期の土器 竹管で並行沈線を施文し、粘土を貼付している。(昭和村糸井宮前遺跡)



縄文時代中期の土器 粘土紐を貼り付け複雑な文様を描いている。(富岡市南蛇井増光寺遺跡)

りそうなものもある。

その一つは、イノシシの頭部を表現した装飾をもつ土器である。これは、群馬県内の縄文時代前期の土器の装飾として数多く出土しているものである。縄文土器には、幾何学的な文様のほかに、人物や動物の文様が描かれたものも存在する。イノシシは一度にたくさんの子供を産む動物であり、縄文人は、そうしたイノシシを子孫繁栄や多産・安産の象徴として土器に表現したものと考えられるのである。縄文土器の文様は、単なる文様

として描かれたものだけでなく、このイノシシの装飾のように、さまざま祈りや希望が描かれているのであろう。そして、豊かな恵みを与えてくれるとともに厳しい表情も見せる自然に対する感謝や畏怖や、その集団の象徴としての文様、あるいは集団の物語的な文様が描かれている可能性もあろう。いずれにしても、縄文人が土器づくりをするうえで文様を描き続けたのは、その一つひとつの文様に大切な意味が込められていたからと考えられるのである。



獣面把手 土器の口の部分にイノシシの顔が表現されている。(高崎市神保植松遺跡)

・参考文献・

- 赤坂憲雄 2007 『岡本太郎の見た日本』
- 甲野勇 1995 『縄文土器のはなし』(解説付き新装版)
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『最新情報展展示レポート6 縄文土器が語る群馬風土』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『群馬の遺跡2 縄文時代』
- 藤村東男 1984 『縄文土器の知識II』



縄文時代後期の土器 沈線文を多用し、異なる器形の土器にも類似した文様を描いている。(太田市矢太神沼遺跡)

亥 (い)

- 出土遺物に見る、 人とイノシシの関わり -



新年、あけましておめでとうございます。

2019年は平成から新しい年号に変わる変化の年であり、亥年でもありますね。

今ではあまりなじみのないイノシシですが、10ページの「変化する文様と意味」にもあったように、ずっとずっと昔は身近な存在だったようです。

縄文前期（約6,000年前）頃、動物のモチーフが付く土器が出始め、その中でも最初に現れた動物がイノシシとされています。しかし、全国どこでもイノシシ付き土器が流行していたわけではないようで、この土器が確認されている場所は東日本にとどまります。さらに、群馬県から離れた地域ではあまり多く見られないことから、群馬県西南部の地域の人々が作り始めたのではないかと考えられています。代表的な遺跡は安中市の中野谷松原（なかのやまつばら）遺跡や高崎市の神保植松（じんぼうえまつ）遺跡です。

イラストと、10ページに載っているイノシシ付き土器の写真を見比べてみましょう。土器のイノシシには牙がないことにお気づきでしょうか。なぜ、牙がないのか？これは、メスまたは子どものイノシシを表しているのではないかと考えられています。子孫繁栄に、一度に4頭ほどの赤ちゃんを産むメスの表現がぴったりではないでしょうか。

当事業団では、新春特別企画としてイノシシ付き土器を1月末まで展示しています。ぜひ、群馬ならではの遺物を見にいらしてください。祈りを込めてつくった縄文人の様子が一つ一つの土器から伝わってくるようです。

イノシシに関係する四字熟語に「猪突猛進」があります。目標に対して周りや後先のことを気にせずまっすぐに突き進むこと。とありますが、向う見ず…とまではいかないながらも、前を向いて元気に一年を過ごしたいですね。

本年もどうぞ、よろしくお願い申し上げます。

・参考文献・

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993

『新保田中村前遺跡Ⅲ』

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005

『群馬の遺跡2 縄文時代』

かみつけの里博物館 2015 第23回特別展 『イノシシの考古学』

※イラストはフリー素材サイト“いらすとや”からお借りしています。

INFOMATION

※第3期 最新情報展 『古代の装身具』

高価な素材にきめ細やかな細工、装着部位なども現代アクセアリーに共通する部分も多く、また、その目的も「装い」だけでなく「富」として、「願い」や「まじない」を込めて…。

◇展示期間 平成31年1月13日(日)～5月12日(日)
午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
土曜日・祝日は休館

◇ギャラリートーク
平成31年2月3日(日)
松村和男(当事業団職員)

※公開考古学講座

◇期日 平成31年2月23日(土)
◇講師 井上洋一先生(東京国立博物館副館長)
◇演題 『東京国立博物館と群馬県出土遺物』
◇会場 前橋テルサホール
予約不要 / 入場無料 / 資料代実費 / 定員500名

※メールによる行事案内のお知らせ

当事業団では、年間を通じて展示会や講演会など様々な行事を開催しています。メールによるこれらの案内をご希望の方は、下記のアドレスよりお申し込みください。

なお、受付の事務処理上、件名は『行事案内希望』として、本文に『住所・氏名・電話番号』を記入しご連絡下さい。

◇メールアドレス：gunmaifukyu@apricot.ocn.ne.jp

◇QRコード

※携帯電話のメールアドレスへ連絡をご希望の方はパソコンからの着信ができるように設定して下さい。



『遺跡に学ぶ 原始・古代の土器1 縄文土器』

第42号 平成31年1月7日発行

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

☎0279-52-2513(普及課直通)

■本誌は学校および教育関係者向けの埋蔵文化財情報誌です。学校の授業等で誌面内の文章・写真・図面をコピー・利用する場面は著作権フリーです。それ以外でのコピー・利用を禁じます。

■ご意見ご質問は上記宛てに連絡をお願いします。